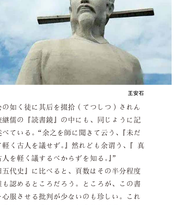
北慕行 訳

西安碑林の拓本作り

## 知る者は言わず

多学少評（知る者は言わず、言う者は知らず）、この言葉は、学ぼうとする者がとるべきる構えであり、これを答っていない。実状を知らず関係する知識をなければ、まず虚心な態度で事に臨み、真面目に学び、浅く早合点をし、軽率に口を滑らしてはならない。さもないと、失敗をしたのち、笑いものになり、大きな損失を蒙るのだ。これは、歴代学者が我々に残してくれた遺産で、学問を修める者、事業を始める上で貴重な経験である。これを無視すれば、誰であろうとさっと大きな痛手を受けることになる。

実際には自らを省とくり、何かを会得することは簡単ではない。慎手をして情報するのは、あれこれ批評に、たいして手間はかからない。昔は「一冊の本を書き終えおけるため、全身全霊を注ぎ込んで不満足なかった。ところが、批判好き面々は、好き勝手に作品をこきおろして、作者をからかわせる。明代に別元禎が『賢奕編』の中で挙げた一例は、この問にたいする回答のヒントになるだろう。



王安石

この書によると、“別社典は常に欧陽公五代史の説誤（あやまり）を摘（あば）き、捌謬（さゃうみゅう）を為し、以て束縛に示す。東坡曰く、『往歳に欧陽公 此の書を著し初めて成る。王荆（けい）公 余に謂いて曰く、『欧陽公五代史を修し、而して二国之を修せず。非なり、子盍（なん）ぞ之を為さざる！』 余謂却て敢て当らず。天和史を為すは、数十百年の事業なり、以て一書成る。其の間に豈能く小過無からんや？ 余故又別公の手に之を加ふるべし？ 余故又別公の手に之を加ふるべし？ 余故又別公の手に之を加ふるべし